

令和 3 年 6 月 14 日現在

機関番号：33929

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2020

課題番号：18K02601

研究課題名（和文）「構成活動」を原理とした音楽科授業における個のイメージの発展過程の研究

研究課題名（英文）A Study of the Developmental Process of Images that Individuals Generate in Music Lessons Based on the Principle of "Constructive-Activity"

研究代表者

横山 真理 (Yokoyama, Mari)

東海学園大学・教育学部・准教授

研究者番号：70784601

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、社会的相互作用の影響を受けながら個のイメージが生成し顕在化し変容する過程を検討することを目的とした。そのために、授業実践者と協働で「構成活動」を原理とした音楽科授業プログラムを計画し、実践の諸記録を収集し授業を分析した。研究の成果は以下の通りである。

(1)「構成活動」を原理とした音楽科表現領域及び鑑賞領域の学習プログラム案を、研究協力者と協働で開発した。(2)授業分析を通して、次の点が示唆された。1)諸媒体の共有によりイメージの共有可能性が高まる。2)音楽自体、歌詞、演奏経験の中で記憶された音がイメージの発生源となっている。3)教科内容の構想がイメージの生成に影響を及ぼしている。

研究成果の学術的意義や社会的意義

未だ十分に解明されていない複雑で動的な社会的相互作用の影響下で起きる個のイメージの生成・顕在化・変容の過程を検討する本研究によって、「構成活動」を原理とした音楽科授業における個のイメージの発展過程の全体構造を解明するための基礎的知見が得られる。ひいては音楽科表現領域と鑑賞領域を架橋した想像的な思考力を育成する新しい音楽科授業デザインの論理構築に寄与することが期待できる。それは音楽表現の結果を重視し学習者の思考過程を問わない旧来の音楽科授業における教育方法を刷新する理論的な基盤を提供する。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to investigate the process by which individual images are generated, manifested, and transformed under the influence of social interactions. To that end, I planned some music lesson programs based on the principle of "composition activities" with lesson practitioners, collected various records of practice, and analyzed the lessons. The results of the research are as follows.

(1) We have developed a learning program plan for the music department expression area and appreciation area based on the principle of "composition activity" in collaboration with research collaborators. (2) The following points were suggested through the lesson analysis. 1) Sharing of various media increases the possibility of sharing images. 2) The source of the image is the music itself, the lyrics, and the sounds memorized in the playing experience. 3) The concept of the subject content influences the generation of the image.

研究分野：音楽科教育

キーワード：イメージ 構成活動 音楽科授業 思考と表現 社会的相互作用

1. 研究開始当初の背景

日本の近代学校成立以降現代に至るまで、音楽科は長い間「技能教科」として扱われる傾向が強く、表現技能の習熟を目標に外的な音楽表現の結果を重視する音楽科授業が定着してきた。しかし、教師が演奏技能を伝授し学習者が演奏を再生するにすぎない旧来の音楽科授業の教育方法は、学習者の能動性や思考力の育成を軽視している点で根本的な改革を迫られている。一方、「構成活動」を教育方法の原理とした音楽科授業においては、外的な音楽表現の構成過程と連動した内的な思考・イメージ・感情の再構成過程に学習者の学びが意味付けられる。旧来の音楽科授業を刷新する可能性を教育方法の原理としての「構成活動」に見出し、「構成活動」を原理とした音楽科授業デザインの開発を継続してきた。開発を通して、学習者は教師の働きかけや学習者同士のかかわり合いの影響を強く受けてイメージを生成させることが浮かび上がってきた。そこで、社会的相互作用の観点から「構成活動」を原理とした音楽科授業における学習者のイメージの変容過程に関して検討し、学習者が生成するイメージが思考と音楽表現の間の相互作用や社会的相互作用の媒介要因として機能しているという示唆を得ている(図1)。しかし、内的な思考やイメージは観察困難な要因であることに加えて教師と学習者や学習者同士の間で起こる複雑で動的な社会的相互作用の影響を考慮して授業を分析することは困難を伴うことから、社会的相互作用の影響を考慮して個の内的な思考やイメージの変容過程を詳細に分析し洞察を得ようとする授業分析者はいなかった。

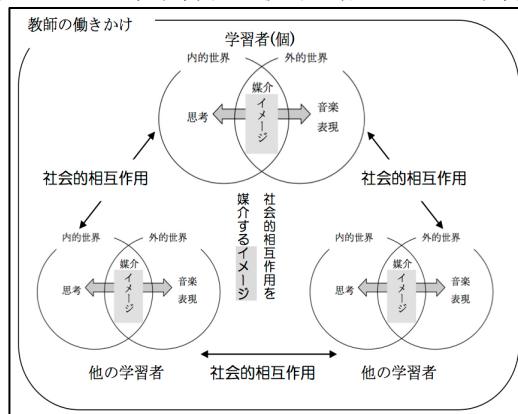


図1 媒介要因としてのイメージ

2. 研究の目的

本研究では、社会的相互作用の影響の下で学習者としての個が想像的な思考を働かせながらどのようにイメージを生成・顕在化・変容させていくのか、その過程を「構成活動」を原理とした音楽科授業実践事例の詳細な分析を通して検討することを目的とする。「構成活動」を原理とした音楽科授業に関する先行研究では、「イメージ」とは何か曖昧にしたまま学習者の学びにおけるイメージの重要性が論じられてきたという問題がある。そこで、イメージの概念について詳細な理論的検討を行い、イメージの概念を次の様に再定義した。「構成活動」を原理とした音楽科授業におけるイメージとは、主体と環境が相互作用する過程で、主体が外的世界にある対象(音楽の構成要素)と内的世界にある生活経験の記憶を関連付けて内的表象を生成し、言語的な媒体(つぶやき・発言・記述など)や非言語的な媒体(口ずさみ・音を鳴らす・身振り・描画など)、あるいは言語的な媒体と非言語的な媒体の組み合わせを通して外的表象として顕在化させた想像的な思考の産物である(図2)。以上に再定義したイメージ概念を前提に、個がイメージを生成し媒体を通して顕在化させる行為は社会的相互作用の中で生起するという仮説をもち、研究に取り組む。

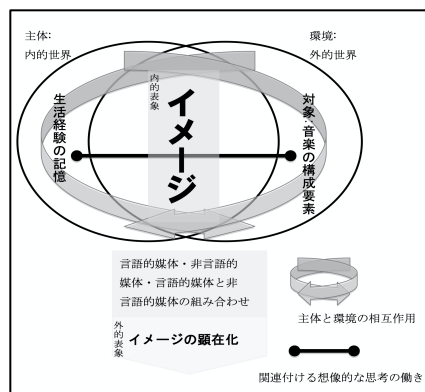


図2 「イメージ」概念のモデル

3. 研究の方法

本研究では、名古屋大学教育方法学研究室グループが継続・発展させてきた「逐語記録に基づく授業分析」の方法論に依拠して、音楽科表現領域の歌唱・器楽・創作の各分野及び鑑賞領域での様々な授業実践記録を詳細に分析しながら比較検討し考察を深め知見を得る。この研究の方法論は、既存の教育理論の中から視点を獲得して授業を分析するのではなく授業実践記録を詳細に分析し解釈を重ねることを通して学習者の学びの事実を捉えようとする視点をもつ。以下、(1)(2)(3)の手順で研究を進める。

(1) 研究授業の構想と授業実践の諸記録の収集

研究倫理に関して同意を得ることを前提に、現職の学校教員を研究協力者として、協働で表現領域及び鑑賞領域での研究授業の学習プログラム案を構想する。構想した学習プログラム案に基づく授業実践者による研究授業を参与観察し、授業実践の諸記録を収集する。以上を継続的に実施する。

(2) 分析資料の作成と授業分析

収集した授業実践の諸記録に基づいて分析対象資料を作成し、授業分析を行う。

(3) 分析結果に基づく検討

社会的相互作用の影響の下で学習者としての個が想像的な思考を働かせながらどのようにイメージを生成・顕在化・変容させていくのか、その過程を授業分析の結果に即して検討する。

4. 研究成果

本研究の結果を、以下の3点を中心に述べる。

(1) 「構成活動」を原理とした音楽科表現領域および鑑賞領域の学習プログラム案の開発

研究協力者（愛知県東海中学校・高等学校 鈴木健司教諭）との協働により、「構成活動」を原理とした音楽科表現領域及び鑑賞領域の学習プログラム案を開発した。開発した学習プログラム案は、次のとおりである（開発年度順）。2018年度：①表現領域音楽創作分野の単元「リズムを意識してイメージに合う音楽を創作しよう」（中学校第3学年）。②表現領域音楽創作分野の単元「拍を意識して生活感情を表現するラップを創作しよう」（中学校第1学年）。③表現領域器楽分野の単元「平調子を意識してイメージの表現を工夫しよう」（中学校第1学年）。④鑑賞領域の単元「主題の反復と変化を意識して《さくら変奏曲》を味わおう」（中学校第1学年）。2019年度：①表現領域器楽分野の単元「アーティキュレーションを意識してイメージに合う演奏をしよう」（中学校第2学年）。②表現領域歌唱分野の単元「速度を意識して《荒城の月》を歌おう」（中学校第2学年）。③表現領域歌唱分野の単元「箏の奏法による音色を意識して情景を表現する音楽を創作しよう」（中学校第2学年）。④鑑賞領域の単元「有拍と自由な拍を意識して日本の民謡を味わおう」（中学校第2学年）。2020年度：①鑑賞領域の単元「ギター音色を意識して『アランプエス協奏曲』を味わおう」（中学校第3学年）。②表現領域音楽創作分野の単元「イメージを表現する旋律を創作しよう」（中学校第3学年）。③表現領域器楽分野の単元「リズムパターンを意識して《カントリー・ロード》の伴奏をギターで演奏しよう」（中学校第3学年）。④表現領域音楽創作分野の単元「箏の奏法による音色を意識して音楽を創作しよう」（高等学校第1学年）。⑤鑑賞領域の単元「多媒体を意識して国内外の舞台芸術を味わおう」（高等学校第1学年）。

(2) 授業分析による知見1: 媒体の組み合わせの共有によるイメージの共有可能性

図形楽譜づくりによる鑑賞領域の授業の分析から、イメージを視覚(感覚的)に表現する媒体である図形、図形が表すイメージを論理的に表現する媒体である言葉、そしてイメージの発生源である音楽が、対応関係を結んで共有されていく過程で、実体のないイメージの共有可能性が生まれ高まっていく(図3~図6)という洞察を得た。

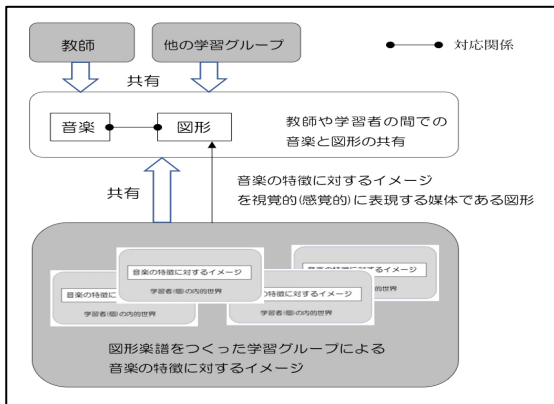


図3 図形楽譜を一覧し音楽を聴く局面

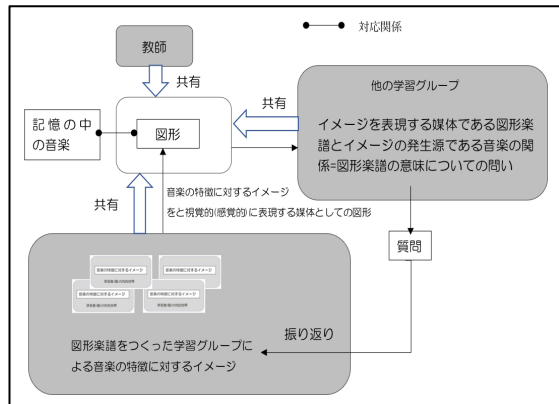


図4 学習者が図形楽譜の意味について質問する局面

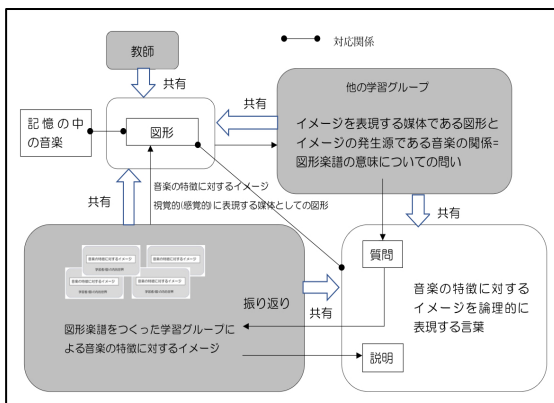


図5 学習者が図形楽譜の意味を説明する局面

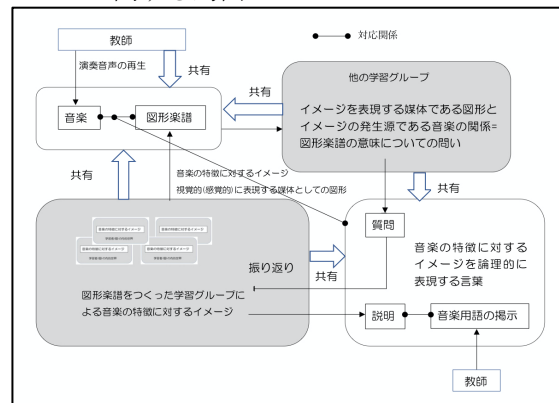


図6 教師が学習者同士の質疑応答に介入する局面

(3) 授業分析による知見 2: イメージの発生源

表現領域歌唱分野の授業の分析から、個のイメージの発生源は、一つには構成要素に還元できない統一体としての音楽そのものであること、二つには速度など多様な音楽の構成要素であり、歌曲においては歌詞がイメージの重要な発生源となっていること、三つめに直接的・間接的な演奏経験を通して知覚した音であり、多様な声が響き合う協働の演奏経験を通して記憶される音がイメージの発生源となっていることが示唆された(図7)。

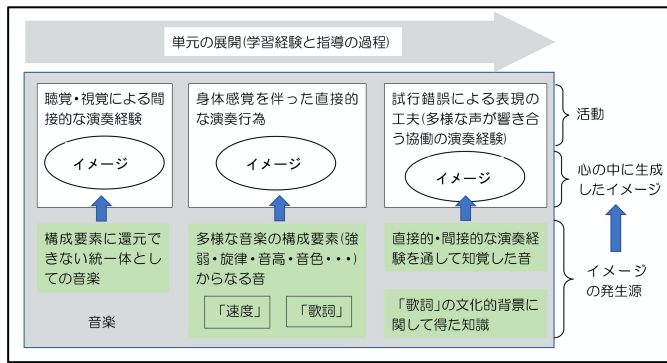


図7 歌唱表現におけるイメージの発生源

(4) 授業分析による知見 3: 授業実践者の教科内容構想の影響

鑑賞領域の授業の分析から、イメージの発生源としての音楽の構成要素の一つである「音色」は一次元的な要素ではなく、他の関連する要素(アーティキュレーション、調、旋律、強弱、音高など)を包摂する多元的な要素として捉えた方がよい。特に、音のつながりに意味を与えるための一つの音の処理の仕方である「アーティキュレーション」がその楽器特有の「音色」を生み出すという点で、「アーティキュレーション」は「音色」に包摂される要素として機能していると考えられる(図8)。「音色」を共通項に楽器演奏を鑑賞する鑑賞領域の授業と楽器演奏によって表現する表現領域器楽分野の授業の各々の教科内容に関連性が生まれるようなカリキュラムを設計することにより、音楽科授業に参加する学習者の学習経験としての統一性が高まることが示唆される。

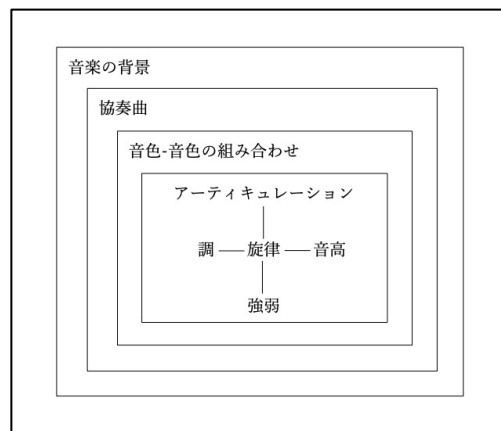


図8 中学校音楽科鑑賞領域の授業での学習経験を通して構成的に学ばれた教科内容の構造的な捉え直し(横山・鈴木 2021)

以上より、「構成活動」を原理とした音楽科授業において学習者同士が関わり合いながら学び個の音楽に対するイメージが生成・変容・発展する過程には、その授業の教科内容を授業実践者がどのように構造的に捉え学習プログラム案に位置付けるかという授業実践者の構想が影響を及ぼしていると考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 横山真理・鈴木健司	4. 巻 7
2. 論文標題 中学校音楽科鑑賞領域の授業での学習経験における教科内容の再構成	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本教科内容学会誌	6. 最初と最後の頁 41,53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 横山真理・鈴木健司	4. 巻 5
2. 論文標題 「構成活動」を原理とした音楽科表現領域歌唱分野の授業 における学力の総括的評価の検討	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 東海学園大学教育研究紀要	6. 最初と最後の頁 37,48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 横山真理無, 鈴木健司
2. 発表標題 中学校音楽科鑑賞領域の授業での学習経験における教科内容の再構成
3. 学会等名 日本教科内容学会第7回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 横山真理, 鈴木健司
2. 発表標題 「構成活動」を原理とした音楽科授業におけるイメージの発生源の検討
3. 学会等名 日本教育方法学会第56回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 横山真理
2. 発表標題 「図形楽譜づくり」による音楽科鑑賞領域の授業におけるイメージの共有可能性の検討
3. 学会等名 日本教育方法学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 横山真理・鈴木健司
2. 発表標題 「構成活動」を原理とした音楽科表現領域歌唱分野の授業におけるルーブリックによる評価の検討－中学校の事例分析－
3. 学会等名 教育目標・評価学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 横山真理・鈴木健司
2. 発表標題 「構成活動」を原理とした音楽科鑑賞領域の授業における批評文ルーブリックの検討 中学校の事例分析
3. 学会等名 日本学校音楽教育実践学会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	鈴木 健司 (Suzuki Kenji)	東海中学校	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------